

書評・紹介

森祖道著

『パーリ仏教註釈文献の研究』

——アッタカターの上座部的様相——

吉元信行

パーリ仏教文献の中には、経・律・論の三蔵以外に、その三蔵中の一々のテキストについて詳細に註釈を加えた「アッタカター」と称する極めて膨大な文献群がある。アッタカターとは、パーリ語で *attakathā* と綴り、「意味の解説」という意味となるから、註釈・義疏、あるいは英語で *commentary* と訳されるが、パーリ仏教文献としてこの語が使われる場合、多少の例外はあるにせよ、一応、三蔵の直接の註釈書であると理解して良い。

従って、あるパーリ語の經典や律典、あるいは論書を厳密に読もうとする場合、それぞれのアッタカターを参照することが不可欠である。その上、このアッタカターは、文献の単なる註釈というだけにとどまらず、思想的にも、あるいは歴史的・文化的・文学的にも種々の重要な資料的価値をもっているものが多い。例えば、思想的に論書以上の資料的価値をもち、パーリ

・アビダルマの基礎資料とされている『清淨道論』^{ウイクラマディッパ}、あるいは、仏伝や仏の前生物語を含む『ジャータカ・アッタカター』、種々の民族学的にも重要な説話を含む『ダンマパダ・アッタカター』や『スッタニパータ・アッタカター』、仏教心理学上でも重要な文献である『アッタサーリニー』、さらに、仏教教理史を研究する上で不可欠の文献である『カターワットウ・アッタカター』などがアッタカター文献であることを知ると、このことはさらにはつきりするであろう。

このように、アッタカターは、仏教を研究する上において極めて重要な資料であるにもかかわらず、一般にあまり知られておらず、先に挙げたごく一部の文献以外はその翻訳や研究は皆無の状態である。しかも、肝心のそのテキストといっても、ローマ字によるPTS版には未刊の部分や絶版で手に入らないものが多くあり、一般になじみの薄いシャム文字によるタイ王室版、ビルマ文字によるビルマ版、セイロン文字によるセイロン版などを必要とすることが多い。しかし、これら諸版といえども、そのすべてが揃っているわが国の大学等の研究機関は皆無であると言つて良い。ちなみに、パーリ仏教研究においては他学に先がけての伝統を有する本学の図書館にも、シンハリーズ版のアッタカター文献は未だ宗全には揃っていないほどである。このような現状であるから、わが国においても、またイギリス・フランス・ドイツ等のパーリ文献研究の先進諸国においても、個々のアッタカター文献のみを対象とした研究はあっても、広くアッタカター文献全体を研究の対象とすることは不可能に近

いことであつた。それだけに、この種のアッタカターの総合的・体系的研究は、学界に待ち望まれていたものである。

此度出版された森祖道博士の労作になる『パーリ仏教註釈文献の研究——アッタカターの上座部的様相——』(以下「本書」と称す)は、その待望を見事に叶えてくれた学界初のすばらしい業績である。本書は、二十余年にも及ぶ博士のアッタカター研究の蘊蓄をまとめたものであり、昭和五十五年東京大学に提出された学位論文でもある。アッタカター研究という学界でも同じ道を行く人のほとんどいない稀少な研究分野であるにもかかわらず、このような総合的・体系的研究がなされ、そして、それがこのような大部の著書として、陽の目を見ることのできたことをまずもって慶ぶ者である。この研究が大成できたのは、水野弘元博士というこの分野では世界最高の業績をもつ指導者を得、そして、東大において、中村元博士を始め、多くの指導・助言者をもつたためであることは言うまでもないが、さらに、

著者のひたむきな研究努力と、次の様な恵まれた研究環境のあったことも忘れてはならないであろう。先ず、著者は、博士課程在学中の若きとき、二年間のスリランカ留学という貴重な機会をもたれた。アッタカター研究の基礎は、この時にできたと言つてもよからう。そして、帰国後、浜松の国際仏教徒協会所蔵のパーリ文献の整理という地道な仕事に当られたことがこの研究をおし進める土壌となつたと思われる。この時に完成された同博士編著『国際仏教徒協会所蔵・パーリ語文献分類目録』(国際仏教徒協会・昭49)は、博士の研究の基礎になつたばか

りでなく、学界のパーリ仏教研究者を益すること大であつた。我われはこの目録を手にしたとき、この協会がわが国のどの大学よりもパーリ文献を完備していることに目を見はつたものである。

この他に、ロンドンのPTS協会から、絶版で入手不能のアッタカター文献のコピーを手に入れたこともあろう。私事ながら、筆者も、かつて、ロンドン市内にあるPTS協会(当時の会長であつたI・B・ホーナー女史の居住されるマンションの一室であつた)にホーナー女史を訪ねたことがあつた。そのとき筆者は、女史に絶版で日本では見ることができないPTS版パーリテキストのコピーを申し入れた。しかし、女史は、コピーの著作権の問題を出されながら、やんわりと筆者の申し出を断られたことを思い出す。森博士は、手紙でホーナー会長を説得してこれらのテキストのコピーを入手したという(森祖道「PTS会長ホーナー博士追悼——生涯と業績——」仏教研究11号一三六—一三七頁参照)。この森博士は、その研究への熱意と業績でホーナー会長の心を開いた数少ない研究者の一人であろう。今は亡きホーナー女史がこの書物を手にされておれば、どのように喜ばれたことであろうか。

なお、本書には、さっそく、斯学の最長老である水野弘元博士によって、詳細な書評が発表された(仏教研究14号)。この書評は、十六頁にもわたり、本書を読むに当って手引きともなるものであり、書評としてはこれに加えるものとして何も無いが、博士がアッタカター研究を始められた当時から、親しく御教授

を頂くなど永年の学恩を被っている者の一人として、徒に屋台骨を重ねることを恐れず、いささか紹介を試みようとするものである。

二

ここで、本書の内容について略述する。

序論 アッタカター文献の概要では、アッタカターといわれる文献概念を規定して、アッタカターに(1)三蔵の註釈(『清浄道論』を含む)、(2)三蔵以外の論書の註でアッタカターと称されるもの、(3)歴史書及び説話集、(4)ティーカー(アッタカターの註)を有する文献の四種類があるが、本書では、(1)の文献群に限定することと、その理由とが論述される。そして、そのアッタカター文献の二々について、PTS版、セイロンSHB版、ビルマ版、タイ王室版、ナーランダー版の順にそのテキストの所在が銘記され、さらにそのテキスト各個についての研究業績がほぼ遺漏なく紹介される。ここを見るだけでも、一部のテキストを除いて、アッタカターに関する研究の結実がいかに乏しいかが痛感される。そして、その乏しい中に独り博士の過去の業績が細部にまで及んでいることが判明する。

ここで蛇足ながら、本書三二頁に *Dhammadpadatthakatha* の説話部分の翻訳として、田辺和子訳『比喻と因縁(四)』仏教説話大系12(すずき出版・昭57)を、そして、本書四三頁に *Sammohavindana* の一部の翻訳として、佐藤密雄訳「蘊分別論(一)——分別論及分別論註離惑論——」聖語研究第二・三輯が

あることを追加しておこう。また、博士は、本書三二頁のジャータカ註の項で「本書 (*Jātakatthakatha*) に対しても見るべき研究も翻訳も未だ現われぬ」とされているが、今日一般に流布されているパーリ・ジャータカと言われるものは、本来のジャータカである韻文部分とそれに対するアッタカターとを合わせたものであり、また有名なパーリの仏伝ニダーナカターはジャータカのアッタカターの序論であることを考えると、これには南伝大蔵経を始め、英訳・独訳等があり、また種々の研究のあることを指摘しなければならぬ。ことに最近春秋社より逐次刊行中の『ジャータカ全集』全十巻は、このアッタカターを含めたジャータカの翻訳であるだけにとどまらず、原典的にも詳細な註のついた綿密な研究でもあることも付言しておきたい。序論の最後に、アッタカター文献の資料的価値として、原始仏教乃至各種のインド研究のみならず、スリランカ仏教研究に不可欠の文献群であることを明らかにしている。そして、付節として、本書では直接には研究の対象とされていないアッタカターの註釈であるティーカー文献の概説をしているのは親切である。

第一篇 源泉資料の検討

我われがアッタカター文献を読むとき、まず戸惑うことは、このアッタカターが他のテキストからの無数の引用や借用によって成り立っており、一体どの部分とそのアッタカター独自の説か判断しかねることである。しかも、その引用資料の名前を明示することは極めて稀であり、他の資料と同文の箇所が随所に散見されるのである。評者は最近、

ジャータカ・アッタカターの序文に相当する『ニダーナカター』を精読する機会をもったが、そこで、その中の仏伝部分が、ほんの一部を除いて、『Buddhavarṣatīhakattha』と同文であり、*yaṅvaṅ* Dhammasaṅgani-*atīhakattha* や Dhammapadati-*kattā* として Suttanipāṭīhakattha とも会通する箇所が多いことに気づいて呆然としたものである。本篇は、そのことを当然として、アッタカター全体にわたって、その資料となった源泉を検討した画期的な実証的研究である。

著者はまず、アッタカターに引用された文献を詳細に調査して、その源泉に(1)パーリ三蔵、(2)藏外三書、(3)他のアッタカター、(4)所謂シーハラ・アッタカター、(5)他派説の引用などがあることを指摘し、その箇所を示した上でさらに個々の資料について詳細な検討を加えている。このことによつて、著者は、アッタカターを大別すると、その原型がインドで成立し、スリランカに将来されて古代シンハラ語に訳されたものと、後にスリランカで製作された二類があり、さらに、それぞれに、アッタカターと名のつく文献原資料(インド成立 \parallel *Atīhakattha*、スリランカ成立 \parallel *Mahā-atīhakattha*)とある特定の専門家集団(インド成立 \parallel *Porāṇā*, *Aṭṭhakathācāryā*, *Bhāṇakā*、スリランカ成立 \parallel *Porāṇakathera*, *Ācariyā* など)によるものがある」と結論する。

そうすると、今日残されているアッタカター文献は、これら原資料を随時引用増広して成立したことになるから、前述の様な各アッタカターに共通する部分のあることは当然のこととな

る。その様な立場から、そのシーハラ・ソースの成立年代を追究した研究が次篇である。

第二篇 源泉資料年代論では、従前に検討した各種の源泉資料の中で、シーハラ・ソースになるアッタカターが根本資料であり、そこにこそパーリ・アッタカターの特徴があるとの立場から、シーハラ・ソースの源泉資料とその成立年代が論究される。

この成立年代を考察するに当つて、著者は、従来のスリランカ王統年代論に関する諸説を再点検した上で、碑文研究などの考古学的考証によるパラナヴェータ新説に基づき、アッタカター成立年代に深い関係のある諸王の年代を大きく修正している。その上で、パーリ・アッタカターに登場する古代スリランカ人一八八名について、年代の判明している一二八人と、判名していない六〇人の一々について検討する。そして、律を伝持した阿闍梨相承についてふれ、スリランカに仏教を将来したと伝えられるマヒンダ長老以下、三十三人目のシーヴァ長老までの年代を再検討して、従来の説を一部修正している。

これらの地道な点検作業によつて、パーリ・アッタカターの源泉資料は、紀元前三世紀の後半にその一部が製作され、前二世紀に黄金時代を迎えたとされる。そして、一世紀にはその主要部分のほとんどが成立し、最終的には三世期末にその全容が完成したと結論する。これを北伝の論書や大乘経典の成立年代と比較するとき、我われは、その成立年代の上からもアッタカター文献の資料的価値の大きいことを改めて認めざるを得ない

であらう。

第三篇 パーリ・アッタカター製作者の研究 以上の様にして、三世紀までに古代シンハラ語によるアッタカターが大成され、以後さして改変もなく伝持されたが、五世紀頃の約百年の間に、ブッダゴーサという秀逸及びダンマパーラ等三人の後継者があらわれて、シーハラ・ツースのアッタカターをパーリ語に翻訳したり、あるいは新しい説明を加えたりして、今日に伝えられるパーリ・アッタカターを作成した。ここで著者は、その中の代表的な論ブッダゴーサに焦点をあて、その伝記と著作のアッタカターについて再検討を加えている。東西の資料を駆使し、第二篇の詳細な歴史的検討をふまえた著者の説には確かに説得力がある。ことに、ブッダゴーサの伝記については詳細を極め、本書の中で七十頁もの紙幅をさいている。その中で著者は、従来の「ブッダゴーサ伝」を再検討して、さらに従前の王統史等の様々な歴史的考証をふまえて、種々の補正を試み、「新ブッダゴーサ伝」とも呼びうる成果に達している。

第四篇 アッタカターに見られるマハーヴィハハラ派とアバヤギリ派系の所説の比較 紀元前三世紀の頃インドからスリランカへ伝えられた南伝上座部の仏教は、今日に至るまで脈々とその法灯を伝持してきた。しかし、スリランカにおける仏教の歴史が幾多の波瀾盛衰を経験してきたことは案外知られていない。その中でも、上座部の伝統を固持し、非妥協的な気風を持ったマハーヴィハハラ（大寺）派と大乘教徒などの異部の教えも積極的に受け容れて、思想的にも開放的な気風を持ったアバ

ヤギリ（無畏山寺）派との抗争は特記すべきであらう。前一世紀の頃、無畏山寺派が大寺派より別立し、その後この派は次第に勢力を伸ばし、法頭がこの地を訪れた頃は最も繁栄していたといわれる。ところが、五世紀に至って、有名なブッダゴーサやその後継者たちが大寺派より輩出したことによって、大寺派の勢力は再び盛んになり、以後しばらく両派は併存したようである。そのため、アッタカター文獻には、この様子を如実に語る記述が随所に認められる。

この点について著者は、アッタカター文獻の中にあらわれる「或る人々」(Anne, Apare, Ihare, Ekacco, Eke, Pare, Yete等)という語及びその説の内容に注目して、それらの説を検討した結果、大寺派以外の無畏山寺派等の説であることを明らかにする。そして、明らかにそれら他派の説を意味していると思われる二十九の事例を、『清浄道論』を始め各アッタカターから抽出し、その一々を紹介する。そして、それらの中に無畏山寺派の説と思われる箇所が多いとして、そこにあらわれた大寺派と無畏山寺派の所説を比較している。この種の研究は、著者が今まで発表してきた多くの研究論文には見られなかったもので、思想の比較研究を研究方法とする評者は特に興味深く拝読した。その中でも、各種の翻訳研究のある『清浄道論』に出る所説については、評者もそのいくつかは目にとめたことはあるが、『長部註』をはじめ、各種アッタカターにおける事例の紹介は重要な問題提起を含むものばかりで、まさに著者の独擅場である。

これらの所説を総合的に検討した結果、著者は、それらの所説は、無畏山寺派の文献とされる『解脱道論』のものもあるが、その多くは本来の無畏山寺派の四ニカーヤに対するアッタカタ¹であったと結論する。本篇における著者の方法論は独創的であり、多くは散逸して幻の文献となっている無畏山寺派所伝の文献の再現にまでせまりうるものである。本篇は、それらの事例研究であるが、今後、各事例の思想的・その他の詳細な分析研究によって更に種々のことがらが判明してくるであろう。そういう無限の可能性を含んだ研究として、等に評者はこの篇の研究を評価し、著者に今後の研究の発展を期待するとともに、後学のためにその方法論や資料の提示を要望する者である。

三

以上、本書の論述に従って、評者の興味の趣くままにその概略を紹介した。七百余頁にも及ぶ大著をわずかの紙幅で紹介したため、遺漏のあることを恐れるが、その点は前掲水野博士による書評に譲りたい。いずれの箇所を読んでも、博士の綿密さと客観性、そしてアッタカタ¹文献そのものへの愛情とも言うべき熱意がにじみ出ており、それがそのまま読者へ伝わって来るようである。しかも、詳細な註には、今日まで学界に発表された内外のアッタカタ¹及び関連資料に関する研究が網羅されており、この一書をもって、現時点におけるアッタカタ¹研究の全貌と研究の動向をつかむことが可能である。

ただ、著者も本書の「はしがき」に指摘している如く、本書

はあくまでも「アッタカタ¹研究の総論であって、文献全体の共通性・相互連関性に着目し、その共通項の解明に主力を注いでいる」ものである。従って、著者の今後の研究は、この総論を前提として、各テキストの個々の特性を究明せんとする各論に移っていくことであろう。勿論、著者一人で全テキストを対象として各論を究めることは当底無理なことであろうが、本書によって、全アッタカタ¹文献を手にすることのできない研究者も、一つのアッタカタ¹を手にして、その各論を手がけることが可能となったから、本書は、アッタカタ¹研究の総論についての輝かしい業績ということにとどまらず、アッタカタ¹研究に未来への新しい展望をもたらすものとして、今後の学界を益すること計り知れないものがある。そして、さらに、著者も示唆されている如く、この研究は、アッタカタ¹の註釈であるティーカー²文献、そして、その註釈アヌティーカー³文献へと展開することが可能である。

以上紹介した如く、本書は、アッタカタ¹の研究としては、我々の前に提供された学界初の本格的な研究書である。といっても、アッタカタ¹に関しては、ここ四半世紀来の研究として、A. P. Buddhadatta の *Atuva Pariksanaya ha Atuva Kathavastu* というスリランカ語による研究書があり、また、ごく最近、ドイツでアッタカタ¹に関する学位論文が提出され、ほんの少数ながら出版されたというのを聞いたが、いずれも筆者は未見であり、入手しにくいものである。それに前者のスリランカ語による研究書は日本を始め西洋の学界にもなじみ

にくい現状である。このような状況において、ここに紹介した森博士の業績を、パーリ・アッタカタ―文献に関する輝かしい金字塔として讃え、大部でしかも高価ではあるが、あえて、原始仏教・インド学・スリランカ関係諸学等を専門とする読者諸兄に推奨する所以である。

(昭和五十九年二月、山喜房仏書林刊、A5判、英文要旨、はしがき等四一頁、本文七一八頁、一九、〇〇〇円)

追記

本稿の校正中に次のような『スッタニパータ・アッタカタ―』についての綿密な訳註が出版された。学界の目もいよいよアッタカタ―文献に向いてきたことを示す出版物の一つとして注目したい。村上真完・及川真介訳『仏のことは註(一)——バラマッタ・ジョーテイカー——』(春秋社・昭60)。